

(蕭々と坐し、書籍に埋もれ……)

しぐやりふかふ

蕭然と坐したまゝ、衆々の書籍に埋もれて微動もせずに、障子の弱々しき柔らかなひかりの、沈^{ちん}と静まる量の書齋にて書見する。

撒かれている卷子や和綴本、擲たれた古い羊皮紙を綴じた大判の皮革装丁本、開かれたままの活字印刷の上製本や雑誌・文庫本まで。城壁のように囲む。

パリ語やサンスクリット語、ヒエログリフや楔形文字、古代ギリシア語やラテン語、フランス語、イタリア語、スペイン語の辞書。漢文読解要諦などがその周囲に点在する。

諸々の仏典や『死者の書』、『ギルガメシュ英雄譚』、『イーリアス』、各種のウパニシャッド、『老子』、『莊子』、『日本書紀』、パルメニデスの断片、『饗宴』、アリストテレスの『形而上学』、ライプニッツ『事物の根本起源』、カントやヘーゲルやニーチェやハイデガーやジャック・デリダの数々の著作。

更に数多飛び散るメモには、「直観的に言えば、一切は意識である。意識の外に対象があつて、それを反映して意識があると断定するどのような根拠もない。第三者を観察すれば、という意見は浅薄だ。結局それも自分の『意識』というものに映るものというところまでしか直観されず、第三者が事象を見て意識に反映させているという行為が実際に意識の外に実在する現象なのかどうかはわからない」「『意識』というが、それが、いったい、どういふことを知らない。我々は事象と対峙して、それが脳を刺激して起こる反映を意識とするが本当か。又思惟としての意識も。考概とは事実に妥当するのか。そもそも考概とは何か。本質とはどういふことか。実際、何か、何が起こっていることか、どういふフォルムであるかを知らない」「唐突に忽然とそれは理解という心的な現象を生ぜしめているという直観しか得られない」「突き詰めても最後はトートロジー（同義反復）でしかない」「真実とは何か。なぜそういう設定が、又は価値観があるのか」「だが真実も考概である。その設定の正しさ、いや、正しさとは真実のことではないのか？」「問いはなぜ検証たり得るのか、いや、問いとは何のことなのか？」「論考が無効ならば、いったい、何が論考を無効と証するのか」「まるで尾を噛む原蛇（ウロボロス）だ。喰うのか喰らわれるのか」「ただ、呆然とするのみ。思考の途中で止まって、どこにも逝けない。宙にいて着地しない。何かを言いかけた口を開いて止まったまま。次の句が継げない。『できませんでした』という結論すらも。未遂不収」

書見を止めて顔を上げ、雨の音に耳を傾けた。

眼前には黙して古き茶碗が畳に端座している。無表情だ。だが思考もインパルスが脳神経細胞を奔ること、脳神経細胞の特定のイオン・チャンネルが開かれて特定のイオンが流入し、脳細胞膜の中と外での電荷の正負の関係が逆になるに過ぎない。化学的な現象でしかない。

ただし「実証科学的な観察が事実そのままであるとすれば、“化学的現象でしかない”という推測は正しい、と言えなくもない」という、前提条件附ではあるが。

などと、理屈で考えても、もうしかたないのでは？ あ、いや、そうとも結論できぬか、いや、それすらも、とも言えぬすらも、すらも。

あゝ、口を開いたものの、途中で止まって、次句が継げぬ。“わからない”とも決さず。

